

オリジナルのたまごを1人でも多くの方に届けるために

生産再開に向けた現在の状況とこれからの歩み

私たちの毎日の食卓にかかせない食材のひとつ“たまご”。そんなたまごの提携生産者の農場で、2022年12月に鳥インフルエンザが発生してから、組合員のみなさんにこれまでと同様にお届けできなくなっています。

生活クラブのたまごは、1974年から組合員と生産者がともにつくってきた大切な消費材です。現在、生産者とともに、たまごの生産再開に向けて尽力しています。そのプロセスと組合員のみなさんの元に届くまでの道のりを紹介します。



オリジナルのたまごの「価値」とは

生活クラブのたまごは、たまごを産む親鶏の品種や、その鶏の育て方もオリジナル。何よりもたまごを産む親鶏の健康を考えて育て、産まれたたまごを無駄なく使いきることを大切にしています。



健康を第一に育てる

生活クラブではたまごの親鶏に、国内で鶏種の生産と改良ができる純国産鶏種の「もみじ」と「さくら」を採用しています。

まず、育種改良した親鶏がたまごを産みます。ヒナがふ化するまでにかかる日数は約21日です。そのヒナが親鶏になるまで、約120日かけて大切に育てます。親鶏はたまごを産むために、各地の6つの提携生産者の農場に引越し。約420日間、たまごを産み続けます。親鶏が引越す時も、役目を終えて出ていく時も、鶏舎の徹底した洗浄やきめ細やかな飼育のために、全羽まとまって一斉に行なう方式（オールイン・オールアウト）を採用しています。

また、「もみじ」と「さくら」のエサには、遺伝子組み換えの混入を防ぐため分別したトウモロコシや大豆かす、国産の飼料用米を配合したものをあたえています。さらに、太陽光と自然の風が入る「開放型鶏舎」で育てているのも、生活クラブのたまごならではの特徴です。

純国産鶏種

鶏卵の国内自給率は約95%といわれています。一見すると高い自給率も“たまごを産む鶏”となると、自給率は約6%のみ。ほとんどが外国で育種改良されたヒナを輸入し、日本でそのたまごを育てている状況です。

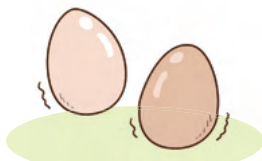
「もみじ」と「さくら」は、日本の気候・風土にあうよう、岐阜県各務原（かかみがはら）市の（株）後藤孵卵場で育種・品種改良を重ねてきました。現在、「もみじ」と「さくら」の育種は日本国内の民間事業者で、この（株）後藤孵卵場1社のみしかありません。それだけ、純国産鶏種は希少なのです。

鶏卵が組合員の元に届くまでについては裏面へ

生活クラブ

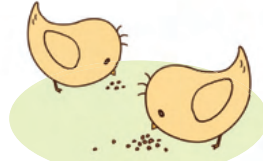
鶏卵が組合員の元に届くまで

① たまごのふ化



ヒナがふ化するまでに約21日かかります。

② ヒナの飼育



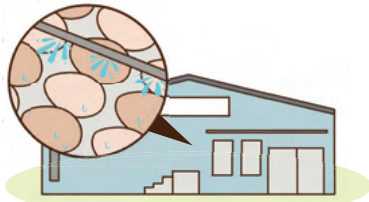
親鶏になるまで約120日かけて育てます。

③ 各地の提携生産者の農場へ



親鶏に成長したら各地の提携生産者の農場に引越し。約420日間、卵を産み続けます。

④ 洗卵・パッキング



品質保持と衛生管理のため、お湯で洗卵をして、バックに詰められます。

⑤ 各地の配送センター・デポへ



配送時は冷蔵でお届けし、鮮度を管理しています。気温が高くなる夏場などに、菌が増えるのを防ぐためです。

⑥ 組合員の元へ



温度変化の影響を防ぐため、お届け・購入後は冷蔵庫での保存をお願いします。

無駄なく食べる

こうして生まれたたまごは、生産者から直接生活クラブに届くため、賞味期限だけでなく採卵日まで明らかで、鮮度のよさを確認できます。また、組合員へお届けする分には一定の規格をもうけています。親鶏の成育期間などにより、生産の過程でその規格にあわず、お届けできないものもあります。たとえば、まだ若い親鶏が産んだサイズの小さなたまごや、年齢を重ねた親鶏が産む大きなヒビの入りやすいたまごなど。このようなたまごは、消費材のマヨネーズやお菓子などの原料に使用しています。また、たまごを産み終えた親鶏は、消費材の親鶏ひき肉や加工品の原料として、大切にいただいています。

各地の生産者と協力しながら希少な鶏種の未来をつなぐ

生活クラブでは、1人でも多くの方にたまごをお届けするための緊急措置として、親鶏の品種やあたえるエサ、育てる環境など、生活クラブの自主基準を一部緩和。提携生産者を中心に、関連農場や団体からも応援を受けて、お届けするたまごをできる限り確保しています。

こうした提携生産者同士の“つながり”が、このたびのたまごの生産再開に大きく寄与しています。現在、鳥インフルエンザが発生した農場で育てる予定だった約8万羽におよぶ「もみじ」と「さくら」を、各地域の関係する農場に委託し育ててもらっています。同じ鶏卵の生産者として組合員にたまごを届けるためにも、生産委託に協力いただき、国産鶏種の親鶏を次の生産につなぐ体制づくりを積極的にすすめています。

これからも希少な純国産鶏種のたまごを絶やさず、守り、食べ続けていくために。提携生産者と力をあわせ、たまごの生産再開を一步ずつめざします。